

格助詞「を」の性質の希薄化の程度性について

—「中を」「のを」「ところを」形式を中心に—

申 義植

要 旨

本稿では、「中」「の」「ところ」の形式名詞と複合する助詞「を」の希薄化について検討する。各形式における「を」は、基本的に動詞との項関係になっていない点で、名詞句と動詞との文法関係を示す格助詞「を」の本質的な性質から離れているものである。また、これらの形式とそれぞれの用法においては、その文法的な性質により格助詞の性質が残存しているものと希薄化が更に進んだものが存在しており、格助詞「を」の希薄化の程度性が見られる。本稿では、各形式における格助詞「を」の希薄化を捉えるために、①構造的な位置づけ、②名詞性の喪失の程度性、③文的な性質の有無において、「中を」「のを」「ところを」の文法的な性質を検討し、それぞれの形式における「を」の希薄化の程度性と複合助詞化の可能性について議論する。

キーワード

格助詞「を」 接続助詞 希薄化 状況の「を」 接続助詞的な「を」 「ところを」

1 はじめに

本稿では、「中を」「のを」「ところを」形式における格助詞「を」機能の希薄化と、その希薄化の度合いにより各形式において、用法が分けられることと複合助詞化していることについて検討したい。

格助詞とは、小野谷(1989)で「文に描かれる出来事を表す動詞の語彙的な意味を充足するために、一定の形式をとって一定の役割をになう名詞を『名詞の格』と呼ぶ(小野谷 1989:74)」と指摘されたように、名詞と動詞との意味的・文法的な関係を示すマーカである。

この内、いわゆる格助詞「を」について、杉本(1986、2009)では、次のような動詞

との文法関係を表示する機能を持っていると捉えられている。(各用法は()に表示)

- (1) a. 太郎が皿を割った。 (対格の「を」)
- b. 太郎が公園を歩いた。 (移動格の「を」)
- c. 太郎が雨の中をさまよった。 (状況の「を」) (杉本 2009)

また、(1c)の状況の「を」は、杉本(1993)によると「何らかの移動を伴う動作を表す動詞」としか共起しないという特徴により、移動格の一種とされているものである¹。一方、この「を」は、「中」という形式名詞との結合と、(2)のように動詞「探す」の目的語ではない点で、(1a、b)のようなものとは性質が異なっている。

- (2) 吹雪の中を山小屋を探した。

本稿では、(2)のようなものを含め、動詞との直接的な文法関係を示さない((1a、b)のような文法関係ではない)「中を」「のを」「ところを」形式における格助詞「を」の性質について議論する。上記した形式が用いられる文は次のようである。

- (3) a. 吹雪の中を山小屋を探した。
- b. 伝玄墨汁の読経が続く中を乗組員たちが順に席を立てて焼香しはじめた。
『虚航船団 1992』
- (4) a. 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」
(レー 1988)
- b. 厳格なペースで貫かれているテンポをベートーヴェンが作品三十一の一の根底に置き、それを前提にして作曲しているのを、グルダは、このソナタにとっては特性となっている細部を暗示してみせたくれそうにもみえる。
『ベートーヴェン32のソナタと演奏家たち 2003』

¹ 例えば、杉本(1993)では、状況の「を」がia)のように移動を含まない動作である動詞「殴る」とは共起できないが、ib)の「殴りかかる」のように移動性が付与されると共起可能であることが指摘されている。

- i) a. *太郎は友人の制止の中を次郎を殴った。
- b. 太郎は友人の制止の中を次郎に殴りかかった。 (杉本 1993)

また、状況の「を」句は、動作の遂行を阻む<逆境³>の意味と解釈され、臨時的な他動性を表す述語句の「対格」としての性質を保つことになる。

一方、天野(2011)では、本稿で扱う「のを」(天野では「接続助詞的なヲ」)文についても、「AがBヲ遮る」という方向性制御系の述語をとる構文型に基づいて分析を行っている。例えば、(8)の文において、「の」節を受ける「を」は、それを項としてとる他動詞が存在せず、機能的に節と節を結びつける接続助詞に近いと指摘されているものである⁴。

(8) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「い
いんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」

(レー 1988)

一方、天野(2011)では、「AがBヲ遮る」型文に基づく意味により、次のように後続節全体(破線)に「対抗動作性⁵」を持つ他動性述語「遮る」のように解釈され、「のを」節を対象としてとると分析している。

(9) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
←
<遮る>

以上の天野(2011)による「中を」「のを」における「を」の分析は、述語の「対象」を示す格助詞「を」の機能を認めていることになる。

³ 天野(2011)は、i)のように、出来事の実現を阻む逆境の意味がないと、状況の「を」句文は成り立ちにくいと指摘している。

i) ?桜が舞い散る中を、社長は練習通りに演説した。(天野 2011)

また、次の文のように、「を」句に<逆境>という意味がなく、(狭義)移動動詞と共起する場合は、状況の「を」句文ではなく、移動空間「を」句文の一種と位置付けられている。

ii) 東京行きの始発便は、そよ風の中を気持ちよさそうに新千歳空港を飛び立った。

(加藤 2006)

⁴ レー(1988)では、本文の(8)を「対比関係の連体節」の文と呼んで、先行底部の主題化、無形化などにより名詞性のが喪失し、ここでの「を」が格関係表示機能の希薄化したものと捉えている。詳細はレー(1988)を参照。

⁵ 天野(2011)では、「対抗動作性」について、自然な方向性を持つ事態、つまり放置していれば実現できる「を」句の状態へ向かう方向性に意図的に力を加え、その方向性を止めたり、変えたりするという、後続する動詞句における行為の意味と捉えている。

2.2 問題の所在

これらの形式における格助詞「を」を中心とした分析に従うと、1節で述べた(3)(4)(5)のような文において、各形式の格助詞機能を認めることができるはずである。しかし、(3a)と(3b)の「中を」では、次のように南(1974)で言うA類従属節に納まるかにおける違いが見られる(#は、対象の複合形式が従属節内にあるという解釈がしにくいことを示す)。

- (10) a. [吹雪の中を山小屋を探しながら]、いろんなことを考えた。
b. #[伝玄墨汁の読経が続く中を乗組員たちが順に席を立てて焼香しながら]、静かに席に戻った。

また、(4a)と(4b)の「のを」形式におけるそれぞれの「の」は、「ガノ交替」における許容度の差が見られることで、名詞性の喪失において程度性が存在すると考えられる。

- (11) a. 二人{が/?の}それを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」
b. 厳格なペースで貫かれているテンポをベートーヴェン{が/*の}作品三十一の一の根底に置き、それを前提にして作曲しているのを、グルダは、このソナタにとっては特性となっている細部を暗示してみせてくれそうにもみえる。

一方、(5)の「ところを」形式に関しては、(12b)のような述部用法を持つという特徴が挙げられる。この「ところ」は名詞的なものというより、モダリティの意味が含まれた文末表現「ところだ⁶」の「ところ」に近くなっている。

- (12) a. というのも、ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを、七番めに生まれたということで「七郎」とつけられました。

⁶ 森田・松木(1989)では、文末の「ところだ」について、「「しようとするところだ」「するところだ」「しているところだ」「していたところだ」「したところだ」等の形で、実現しなかった事柄の予測や反実仮想を示す(森田・松木 1989:259)」と記述されている。

点で異なっており、(10b)のナカヲ②は動詞句内の要素でないことが確認された。その点、「のを」「ところを」形式についても検討したい。

まず、「のを」については、天野(2011)に従って、(13)の文における後続節全体(破線の部分)を「対抗動作性」の意味に基づく「遮る」のような述語とみなすと、「のを」(ノヲ①)節は「～ながら」に納まる。

- (13) a. 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」
((4a)の再掲)
- b. [二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」
と言いながら]、店内に入った。

上記の例に反して、(14)(15)のような「のを」(ノヲ②)節は、それぞれの(b)のように、後続節「～ながら」「～つつ」に納まらない。

- (14) a. 失業率は、昨年6.3%まで至ったのを、雇用政策を行って今年は5.8%と低
くなっている。
- b. #[失業率は、昨年6.3%まで至ったのを、雇用政策を行って今年は5.8%と低
くなりつつ]、改善されている。
- (15) a. たとえば、ソニーがはじめてテレビに取り組んだとき、ソニー以外は世
界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式
をとったのです。 『わが友本田宗一郎 1992』
- b. #[ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけは
クロマトロン方式をとりながら]、生産プロセスを考えたのです。

ここでは、後続節の「対抗動作性」の解釈の問題が関係している。(13)の文においては、後続節の「対抗動作性」の意味が「遮る」のように解釈され、ノヲ①を対象としてとっており、「～遮りながら」節に納まることになっている。しかし、(14)(15)の文におけるノヲ②節は、後続節が「遮る」の解釈になっていないことから、後続節

「～ながら」にも納まっていない。したがって、(14)(15)におけるノヲ②は、(13)のノヲ①とは異なって、後続節の「遮る」の意味を持つ動詞句内の要素ではない点で、対象として機能せず、格助詞ではないと考えられる。

一方、次の接続トコロヲもA類従属節内に収まらないことが確認できる。

- (16) a. もう少しで優勝するところを、ミスして負けてしまった。
b. #[もう少しで優勝するところを、何回もミスして負けながら]、内のチームのリーダーは挫折した。

(16)の「ところを」は、接続助詞用法として機能するため、動詞句内の要素としての格助詞的な特徴は見られない。

以上で検討したように、(10b)のナカヲ②を含めて、(14)(15)のノヲ②、(168)の接続トコロヲは、構造的に動詞句の外側に位置付けられる点で、格助詞「を」の本質的な機能から離れていると考えられる。一方、(10a)のナカヲ①と(13)の他動関係の対象になっているノヲ①は、動詞との直接的な関係を示さない点で格助詞の「を」の性質が希薄化したものと捉えられるが、動詞句内の要素として認められる点により、格助詞性が残存していると考えられる。

4 各形式における名詞性の喪失の程度性について

2.1節で述べたように、「のを」における「の」は名詞性の喪失の差が見られる場合があった。この点に関連して、天野(2012)では、「のを」節の「の」の名詞性を分析するために、2.1節の述べた(17)の「ガノ交替」、(18)の「並立助詞連結」、(19)の「取り立て詞の付加」など⁹の現象を検討し、接続助詞的な「のを」節が完全な副詞節であるそれぞれの(b)の「のに」「ので」節より、名詞性が高いことを指摘している。

⁹ 天野(2012)では、本文中のテストの以外に、「の」節への連体修飾節付加のテストも用いられている。

- i) a. 気がかりだった、生徒が諦めようとするのを、教員たちは何度も励ましのことばをかけた。
b. *気がかりだった、生徒が諦めようとするので、教員たちは励ましのことばをかけた。

(天野 2012)

ただし、本稿では、「ノヲ②」の「の」節の文が長くて、適用が難しい場合があるので、ii)のような文法性だけを確認し、名詞性テストとしては用いない。

- ii) *気がかりだった、ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。 [ノヲ②]

- (17) a. その日も、アドリアーナが/の送ってきてくれたのを、まだ時間があるから、このザッテレの河岸を散歩しようとする事になったのだった。
b. アドリアーナが/??の送ってきてくれたので、夜道が怖くなかった。
- (18) a. ?多くの実験員が、結果が出ずやめようとするのや、時間がなくてあきらめようとするのを、室長は最後まで目標を捨てなかった。
b. ??地域の民謡サークルになじめなかったのや、学校の音楽が嫌いだったのに、オペラに出会って突然音楽の神様が降りてきた。
- (19) a. 体調が悪いからと固辞するのをさえ/も、社長は無理矢理グラスを満たした。とにかく酒を強要する人なのだ。
b. *体調が悪いからと固辞するのでさえ/も、社長はグラスを満たさなかった。

(天野 2012)

ただし、上記した「のを」節の文においては、(41a)の文を除くと、ノヲ①に限って、名詞性が検討されている。それに対して、次のノヲ②における名詞性を検討すると、上記の「のを」節の名詞性とは異なっていることが確認される。以下、「ガノ交替」「並立助詞連結」「取り立て詞の付加」の順で示す。

- (20) a. ものすごい強風{が/?の}吹いているのを、東京行きの最終便が離陸しようとしている。 [ノヲ①]
b. 彼{が/*の}弁護士事務所で働いているのを、契約の専門職にとアスレチックにさそわれ、四十代初めでGMになった。 [ノヲ②]
c. たとえば、ソニーがはじめてテレビに取り組んだとき、ソニー以外は世界中{が/*の}みなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。 [ノヲ②]
- (21) a. ?多くの実験員が、結果が出ずやめようとするのや、時間がなくてあきらめようとするのを、室長は最後まで目標を捨てなかった。 (天野 2012)
[ノヲ①]
b. *この時の保健大臣だったフラビエール氏も、環境団体の活動家だったのや、IRRM(国際農村復興運動)という主に地域開発の活動をしているNGOの代表だったのを、ラモス大統領によって任命されたばかりだった。

[ノヲ②]

- c. *日本ではあまり個人の意見を言わないように指導しているのや、中国でもみんなの意見を重視しているのを、欧米では自分の意見を積極的に述べるように教育している。 [ノヲ②]

(22) a. 体調が悪いからと固辞するのを{さえ/も}、社長は無理矢理グラスを満たした。とにかく酒を強要する人なのだ。 (天野 2012) [ノヲ①]

- b. *これまでロシア経由であったのを{さえ/も}、今回の旅では初めてウィーンを経由(往途、帰途とも宿泊)することになった。 [ノヲ②]

- c. *実際の鶴ヶ岡城は平城であったのを{さえ/も}、五層の天守閣と立派になっている。 [ノヲ②]

上記のように、「ガノ交替」「並立助詞連結」「とりたて詞の付加」の現象において、ノヲ①とノヲ②の名詞性には差が見られる。ノヲ①は、天野(2011)において他動的な構文における対象のように解釈されるもので、天野(2012)での指摘のように名詞性が残存している点で、格助詞「を」の性質が残っていると考えられる。一方、ノヲ②に関しては、「の」の名詞性がノヲ①より低い点により、むしろ、(17b)(18b)(19b)のような接続助詞「ので」「のに」の「の」に近い名詞性が見られる。

一方、「中を」について、(23)から順に「ガノ交替」「並立助詞連結」「取り立て詞の付加」の現象を検討すると、ナカヲ①では名詞性が残っているのに対して、ナカヲ②の名詞性は喪失していることが確認される。

(23) a. 鐘の音{が/の}響く中を公園を歩いた。 [ナカヲ①]

- b. 二人の女性{が/?の}感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげながら椅子に反り返った。 [ナカヲ②]

(24) a. 太郎はいつも雨の中や、吹雪の中を公園を走った。 [ナカヲ①]

- b. ??観衆の声援の中や、国歌が流れている中を、涙を流しながら(感動して)メダルに見入った。 [ナカヲ②]

(25) a. 桜吹雪きの中を{さえ/も}公園を歩きたくなかった。 [ナカヲ①]

- b. *桜吹雪きの中を{さえ/も}、桜の花びらを(ゆっくりと)眺めなくなかった。 [ナカヲ②]

また、接続トコロヲに関しても次のように、名詞性が喪失していることが確認される。

- (26) a. 本来なら、私たちの命{が/??の}なくなるはずのところを、こういう形ですっきり収めるということで、命乞いをしたんです。
- b. *もう一発で得点するところや、もう少しで優勝するところを、ミスして負けました。
- c. *ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを{さえ/も}、七番めに生まれたということで「七郎」とつけられました。

以上から、各形式において、ナカヲ①、ノヲ①では名詞性がある程度残っていること、ナカヲ②、ノヲ②、接続トコロヲでは更に名詞性が喪失していることが確認される。この名詞性の喪失の程度性は、節自体の文的な性質に関係しており、後接する助詞「を」の格助詞性の希薄化の程度性にも影響を与えられ考えられる。

5 文的な性質と節の独立性について

申(2016)で述べたように、接続トコロヲの節においては、節内に「当為性」を表すモダリティ表現「べき」「はず」などが含まれる特徴が見られた。接続トコロヲは、2.2節で述べたように、節内のモダリティ的な性質により、(12b)のように「ところだ」という述部用法を持つ。ここで、節の独立性を考えるために、他の形式においても述部用法の有無を確認する必要がある。ただし、「中を」の場合、「二人の女性が感心して見つめる中だ」とような文は存在しないので、ここでは検討しない。

一方、「の¹⁰」節における「の」について、大島(2010)では、文末表現「のだ」における「の」と同一要素である可能性が示されている。大島(2010)では、大島(1995)を引用し「「Pノダ」の機能は、ある命題表現「P」を別の命題(もしくは非言語的状況)に関連するものとして提示することである。(大島 1995:110)」と述べている。この指摘に基づくと、(27)の文におけるノヲ①、(28)ノヲ②は、基本的に「だ」が後接した表現ができる。

¹⁰ 大島(2010)では、「Sの」形式を「ノ型補文」と呼んでいる。本稿の「のを」節も「Sの」形式として捉えられている。

- (27) a. 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手を振って
…
b. 二人がそれを手帳に写しとろうとするのだ。
- (28) a. ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけは
クロマトロン方式をとったのです。
b. ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのです。

この文末表現の「のだ」は、庵(2001)では「関連付け」の用法¹¹として捉えており、野田(1997)では、ムードの「のだ」用法¹²としているものである。ここでは、このような文末表現「のだ」のモダリティ的な意味に注目し、ノヲ①とノヲ②においてこの意味が存在するかを確認したい。この点の確認のために、ノヲ形式が用いられるそれぞれの文のタイプにおいて、文末表現「のだ」と逆接の「が」による文の連結を試みた文との意味を検討すると、次のようになる。(＃は、文末表現「のだ」と「のを」における「の」が同一な解釈ではないことを示す)

- (29) a. 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」
b. ??二人がそれを手帳に写しとろうとするのだが、じれったそうに手をふって
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」
- (30) a. 普通なら辛くて、逃げ出すかノイローゼになるのを、じっとその重みに
堪えて頑張ってるんだわ。
b. #普通なら辛くて、逃げ出すかノイローゼになるのだが、じっとその重みに
堪えて頑張ってるんだわ。

(29b)の許容度が低くなる原因として、「の」節内の事態が「る」形になっていることが挙げられる。つまり、「写しとろうとしたのだったが」のように「た」形なら文

¹¹ 庵(2001)では、関連付け「のだ」について、「(先行文)P。Qのだ」という形式に基づいて、「QがPの理由を説明している場合」、「QがPの言い換えである場合」、また、状況と結びつける「話し手の解釈」「発見」の用法が取り上げられている。

¹² 野田(1997)では、ムードの「のだ」について「文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心的態度を表すもの(野田 1997:104)」と定義している。

法的な文になると思われる。また、(30a)のノヲ①は後続節との他動的な解釈が読み取られるもので、(30b)のようなムードの「のだ」のような心的態度を表すという意味は持っていないと考えられる。(この点、(29b)を「～したのだったが」に置き換えた場合も同様であると思われる)

一方、次のノヲ②における「のだが」の交替文も参照されたい。

- (31) a. はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか、生活責任者・保育者としての心情も移しこめるようになったのだと思うのです。

『日本子育て物語 1991』

- b. はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉のだが、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか、生活責任者・保育者としての心情も移しこめるようになったのだと思うのです。

- (32) a. ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。

- b. ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのですが、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。

上記の「のだが」は、野田(1997)で指摘された従属節におけるムードの「のだ」の用法である逆接の「のだが」と類似している。

- (33) a. 私はドイツ語もできるが、中国語もできる。

- b. 私はドイツ語もできるのだが、中国語もできる。 (野田 1997)

野田(1997)では、(33b)のように「のだが」が用いられると従属節の事態と主節の事態との矛盾・対立、話し手の意外性や不満を強く示すという性質により、「のに」との類似性が見られると指摘されている。以上の議論から、本稿では、(31)(32)のノヲ②について、野田(1997)で捉えたムードの「のだ」の意味が存在しており、文的な性質を有していると判断する。

一方、接続トコロヲについては、2.2で検討した述部用法を持つ上に、終助詞的に用いられる現象が挙げられる。

- (34) a. 本来なら、私たちの命がなくなるはずのところを、こういう形ですっきり収めるということで、命乞いをしたんです。

『倉敷・白壁小路殺人事件 2002』

- b. 本来なら、私たちの命がなくなるはずのところを...
(35) a. ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを、七番めに生まれたということで「七郎」とつけられました。
b. ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを...

(34)(35)のように、接続トコロヲ節は、終助詞用法で用いることができる。これは、ムードの述部用法を持つノヲ②が、次のように終助詞用法として用いられないことと対照的である。

- (36) a. はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか、生活責任者・保育者としての心情も移しこめるようになったのだと思うのです。
b. *はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを...
(37) a. 『暗殺の年輪』で紹介されているところを引用すると.....中略.....実際の鶴ヶ岡城は平城であったのを、五層の天守閣と立派になっている。
b. *実際の鶴ヶ岡城は平城であったのを...

ここで、接続トコロヲにおける(33)(35)の終助詞用法は、森田・松木(1989)の取り上げた終助詞の働きをする「ものを」と類似している。

- (38) 「それほどに思い合ってる仲と知ったらあんなに勧めはせぬものを」

(森田・松木 1989)

森田・松木(1989)によると、この用法について「逆接条件を示し接続助詞的用法の「もの」であり、そこから後件が省略されたと考えることができる(森田・松木 1989: 158)」と述べられている。この指摘に基づくと、接続トコロヲについては、節としての独立性を持つことで、ここに後接する「を」は格助詞としての性質が相当希薄化さ

れているものと捉えられる。一方、ノヲ②の場合、ムードの「のだ」という述部用法は持っているものの、「のを」節のままで後続節の省略はできない点で、格助詞機能の希薄化の程度性においては、接続トコロの「を」ほど進んでいないと考えられる。

6 格助詞「を」の性質の希薄化の程度性と複合助詞化の可能性

これまで、「中を」「のを」「ところを」形式における文法的な性質と、それぞれの形式における格助詞「を」の機能の希薄化について検討した。そして、本稿で検討した文法的な性質において、各形式には格助詞の希薄化の程度性が見られることが確認された。

本稿で検討した現象において、各形式における格助詞「を」の性質の希薄化にかかわる特徴は次のようにまとめられる。

(39) 各形式における格助詞「を」性質の希薄化の程度性

	①構造的な位置づけ	②名詞性の喪失の程度性	③文的な性質(述部用法)の有無	*終助詞的用法の有無
ナカヲ①	動詞句内	残存	なし	なし
ナカヲ②	動詞句外	喪失		
ノヲ①	「対抗動作性」の動詞句内 ¹³	残存	なし	なし
ノヲ②	「対抗動作性」の動詞句外	喪失	有	
接続トコロヲ	動詞句外	喪失	有	有

(39)のように、各形式と用法の振る舞いより、格助詞「を」の性質の希薄化の程度性が捉えられる。各形式には、それぞれの現象における文法的な振る舞いの違いにより、機能の違いが存在することも予測される。

ナカヲ①とナカヲ②は、構造的な位置づけと名詞性の違いにより、ナカヲ①がより

¹³ この項目で捉えている動詞句の範囲は、天野(2011)で捉えた「のを」節と後続節における他動関係により、構成される臨時的な他動詞「遮る」で構成される動詞句である。

格助詞的な用法であり、ナカヲ②に関しては他の機能を考えなければならない。

更に、節の独立性という観点から言うと、ノヲ②と接続トコロヲは、モダリティ的な意味を含む述部用法が存在している点で、更に格助詞性が希薄化していると考えられる。また、接続トコロヲについては、モダリティ的な意味を持つ述部用法と、終助詞用法として用いられる点により、この「を」については最も希薄化が進んでいるものと捉えられる。このように、各形式において、格助詞性の希薄化が進み、格助詞としての機能がなくなる場合については、複合助詞としての位置づけが必要であると思われる。

以上のことから、各形式と用法において、格助詞「を」性質の希薄化の程度性は次のようになり、複合助詞化に関係すると考えられるが、複合助詞化については更に検討が必要である。



7 まとめ

以上で、「中を」「のを」「ところを」について、格助詞的なものとそれ以外のものにおける格助詞「を」の希薄化の程度性を捉えた。これらの形式において、助詞「を」は、動詞と直接的な関係を持たない点で本来の機能が希薄化したものであるが、格助詞性が残存しているものと更に希薄化が進んだものと分けられ、この希薄化にも程度性があると考えられる。ただし、それぞれの形式における格助詞の「を」の希薄化の程度性が、複合助詞化にかかわる詳細については更に検討が必要であり、この点については今後の課題にしたい。

参考文献

- 天野みどり (2011)『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院。
- 天野みどり (2012)「名詞節か副詞節か—「の」節の名詞性・節性検討—」『国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」公開シンポジウム』
- 庵功雄 (2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク。

- 大島資生 (1995)「応答句「そうです」の機能について」『日本語研究』11 pp.109-119,東京都立大学.
- 大島資生 (2010)『日本語連体従属節構造の研究』ひつじ書房.
- グループ・ジャマシイ (1998)『日本語文型辞典』くろしお出版.
- 小野谷哲夫 (1989)「名詞と格」『講座日本語と日本語教育4 文法・文体(上)』明治書院.
- 佐伯暁子 (2013)「現代語における状況を表す「～(の)中を」「～(の)中φ」について」『日本語文法』13-2 pp.54-70.
- 城田俊 (1993)「文法格と副詞格」仁田義雄 (編)『日本語の格をめぐって』 pp.67-94,くろしお出版.
- 申義植 (2014)「状況の「を」句文成立の意味的な制約について—時間的状況における展開プロセス—」『筑波応用言語学研究』21 pp.82-95,筑波大学.
- 申義植 (2016)「接続助詞として機能する「ところを」について」『日語日文学研究』97 pp.81-99,韓国日語日文学会.
- 杉本武 (1986)「格助詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (著)『いわゆる日本語助詞の研究』 pp.227-380,凡人社.
- 杉本武 (1993)「状況の「を」について」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会篇)』6 pp.25-37,九州工業大学.
- 杉本武 (2013)「複合助詞の品詞性について—名詞を構成要素とする複合助詞を例に一」藤田保幸 (編)『形式語研究論集』 pp.87-103,和泉書院.
- 野田春美 (1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館書店.
- 森田良行・松木正恵 (1989)『日本語表現文型』アルク.
- レー・バン・クー (1988)『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』くろしお出版.

用例出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』(中納言を使用),国立国語研究所.
(申義植 筑波大学大学院生)

On a degree of the weakening in property of case particle “o”:

Focus on “*naka-o*”, “*no-o*”, “*tokoro-o*”

SHIN Yishick

This paper discusses a degree of the weakening in property of case particle “o” that connected “*naka*”, “*no*”, “*tokoro*.” This “o” departed form case particle “o”, because it is not connected verbs in argument relation. In these Forms, We may say that there are those that leave the property of case particle and are those that weaken its property according to its grammatical behavior, and there is a degree of the weakening in property of case particle “o”. In order to grasp the weakening of property of case particle “o” in each form, We discuss ① structural position, ②a degree of nounal loss, ③existence of sentential property in the forms of “*naka-o*,” “*no-o*,” “*tokoro-o*.”